

# 在郷町の天王祭礼

桐生新町と大間々町の事例から

板橋春夫

Tenno-sairei in Zaigo-cho: from the Examples of Kiryu-shimachi and Omama-machi

はじめに

- ①「桐生の里ぶり」にみる天王祭礼
- ②市神の御輿と獅子頭
- ③桐生新町の天王祭礼と屋台
- ④大間々町の天王祭礼
- ⑤伝統的祭礼からイベント的祭りへ  
おわりに

## 【論文要旨】

桐生新町の天王祭礼は由緒ある祭礼で、市神は桐生織物と深い関係にある。御旅所は当番町の天満宮寄りに安置するのが習わしであった。桐生新町では明治三十年代まで鉾や屋台を引き回していたが、電灯線が引かれ渡御に支障が出るようになって中止となり、御輿も現在廃止した。近世期のにぎわいぶりは彦部信有「桐生の里ぶり」に詳しいが、現在、その面影を見出すのはむずかしい。そこで隣接する在郷町である大間々町の天王祭礼でその様子を見ていく。桐生新町の御輿は「天王伝右衛門」という人物がかつて掌握していたが、何らかの理由で退転。正徳二年（一七一二）に江戸の職人が御輿を製作。桐生新町の御輿は大間々へ回っていたという。

大間々町の天王祭礼は、寛永六年（一六二九）、京都から八坂神社の分霊を市神として勧請し、三丁目大泉院内に祀ったのが始まりである。仮御輿だったので万治元年（一六五八）に新規製作。町の大火で消失してしまい、寛政三年（一七九一）に新規

製作した。祭日は徳川家康が関東に入った際に絹織物を献上したところ、それが勝利の吉例になったのにちなむというものである。

大間々町の天王祭礼に関する聞き書きを行い、具体的な祭りの様子を記述した。全国各地で伝統的祭礼が衰退し、代わりに行政主導型の新しいイベントとして改編する動向がある。桐生市や大間々町の天王祭礼はそれぞれ高度経済成長期に大きな変化があった。本稿では大間々町の天王祭礼を聞き書きと地元紙『東毛タイムス』の記事を利用して変化を探った。